

日本語「が」の「中立叙述」の解釈

杉浦 滋子

キーワード：日本語 「が」 中立叙述 総記 listing

要旨

日本語の「が」の解釈の分析に用いられる総記(exhaustive listing)の概念に含まれる listing にはすべて挙げる場合と一部のみ挙げる場合、挙げる要素が名詞句である場合とそうでない場合、まとめて挙げる場合とひとつずつ挙げる場合があり、「が」が総記と言われるのは名詞句である要素をまとめてすべて挙げる場合であると指摘した。さらに、久野(1973)の制約に反し、述語が恒常的状态・習慣的行為を表す文で「が」に中立叙述の解釈がある例を挙げ、中立叙述の解釈があるのはそれらの文に上位要素があるためと主張した。

1. 言語の中の listing

日本語の「が」には「中立叙述」(neutral description)と「総記」(exhaustive listing)の解釈があることが広く受け入れられている (Kuroda 1964、久野 1973)。総記の「が」が用いられている場合には「そのようなもの／人は他にない」という意味があり、中立叙述の「が」が用いられている場合にはその意味がない。(1a,b)どちらにも「が」が現れているが、(1b)の場合には(今話題になっている人の中で)「他に当直はいない」という意味があり、これが総記の「が」と呼ばれる。それに対し、(1a)には二つ解釈がある。ひとつの解釈では田中さんについて述べているのみであり、他の人については何も述べていないというもので、この場合の「が」が中立叙述の「が」と呼ばれる。加えて総記の「が」の解釈も可能である¹。

1(a)田中さんが結婚した。

(b)田中さんが当直だ。

また、日本語では(1b)のような総記の「が」を用いた文は要素を倒置させ、「は」を用いた(2)の文と意味の上で等価である (上林 1988)。(1b)のタイプは指定文、(2)のタイプは倒置指定文と呼ばれる。

¹ 音声言語ではイントネーションの違いがある。

2 当直は田中さんだ。

「総記」とは「ある条件にあてはまる要素をすべて挙げる」という意味であるわけだが、英語の *exhaustive listing* という表現の方がこの意味を明確に示す。そしてこの意味は「ある条件にあてはまる要素を挙げる(listing)」ことと「挙げるべき要素はすべて挙げる(exhaustive)」という二つに分けて考えることが可能である²。より正確に言うと、ある条件にあてはまる要素を挙げる(listing)にあたって、すべて挙げる場合(exhaustiveな場合)とそうでない場合、つまり一部を挙げる場合があるということである。リストという名詞を使うならば、リストを作るにあたって完全なリストを作る場合と不完全なリストを作る場合があるということになる。不完全なリストという表現だと有用性がないように感じられるかもしれないが、条件にあてはまる要素がひとつ(またはそれ以上、その場で必要な個数)判明すればいいという状況は日常の中で容易に考えられる。例えば車にガソリンを入れる必要がある際に「現在地に近いガソリンスタンド」という条件にあてはまる要素を探す、ひとつだけ判明すれば用は足りる。また、仕事量から言って二人いればいいという作業がある際には「その時間に手伝える人」という条件にあてはまる人間の完全なリストは必要ではなく、二人だけ判明すれば十分である。

また、*exhaustive* であっても総記される要素が複数である場合とひとつである場合がある。(1b)では「当直である」のは「田中さん」というひとつの要素のみだったが、(3a-c)で見るように複数の要素である場合もある。

3(a)田中さんと鈴木さんが当直だ。

(b)絵を描くことと家庭菜園とジョギングが最近の父の楽しみだ。

(c)図書館と公民館が無料だ。

なお、次のように条件の意味からひとつの要素しかあてはまらない場合もある。

4(a)田中さんが鈴木さんの婚約者だ。

(b)ブレーキの故障が事故の主因だ。

あてはまる要素が一つのみの場合に総記という表現は違和感があるかもしれないが、定着した表現であるので総記という表現を引き続き使うこととする。

もうひとつ重要なのは項目の挙げ方である。リストの項目の挙げ方には、項目をまとめて挙げるやり方と項目をひとつずつ挙げていくやり方がある。(5a)と(5b)はどちらも「うちの課でまだ結婚していない人」というリストの項目を答えているが、(5a)ではま

² このことは西山(2003:134)において指摘されている。そこでは前者(listing)は「が」の意味として考えるべきであり、後者(exhaustive)は語用論的に得られる解釈とする。

とめてひとつの文で答えている。まとめて答える場合には総記と解釈するのが普通である。それに対して(5b)ではリストにひとつひとつ項目を挙げる形で答えていて「が」は中立叙述の解釈となる。後者の挙げ方にはリストが完全な場合、つまり項目が総記される場合も、不完全な場合、つまり総記されない場合もある。

- 5(a) (「うちの課で独身なのって誰だっけ?」)「山田さんと加藤さんが独身です。{ほかはみんな既婚者です。／?ほかはわかりません。}」
(b) (「うちの課で独身なのって誰だっけ?」)「山田さんが独身ですね、それから加藤さんが独身です。{ほかはみんな既婚者です。／ほかはわかりません。}」

当然のことだが、総記の解釈がある(5a)には対応する倒置指定文(6a)が存在するが、中立叙述の解釈となる(5b)に対応する倒置指定文(6b)は不適切である。

- 6(a) (「うちの課で独身なのって誰だっけ?」)「独身なのは山田さんと加藤さんです。」
(b) (「うちの課で独身なのって誰だっけ?」)「×独身なのは山田さんですね、それから独身なのは加藤さんです。{ほかはみんな既婚者です。／ほかはわかりません。}」

すでに触れたように総記の「が」が用いられ、かつ述部が名詞句である平叙文(指定文)には認知的意味が等しく、要素が倒置された文(倒置指定文)が存在するが、(3c)のように述部が名詞句でない場合には(7)のような認知的意味が等しい分裂文が存在する(三上 1963:164-166)。

7 無料なのは図書館と公民館だ。

述語によっては(8)に対する(9a,b)のように倒置指定文と分裂文の両方が可能である。

- 8 田中さんと鈴木さんが既婚者だ。
9(a)既婚者は田中さんと鈴木さんだ。
(b)既婚者なのは田中さんと鈴木さんだ。

これは、「既婚者」が属性を表す要素として機能するからである。(8)の文の「既婚者」はある集合を指示する名詞であり、「鈴木さん」と「田中さん」がその集合の要素であることを表すとも言えるが、見方を変えると「鈴木さん」と「田中さん」は「その集合の要素である」という属性をもつ。このように解釈されると(3b)の「無料だ」と同じように(9b)の分裂文が生じる。

なお、命令文、話し手の意志を表す文においては総記の「が」が現れるが、文の性質

上倒置はできない。

10(a) (誰かが行かないといけない) 田中さんと佐藤さんが行って。

(b) (誰かが行かないといけない) じゃあ私が行く。

(10b)においては形式的には対応する分裂文(11)を作ることができるが、意味は(10b)と異なる。

11 行くのは私だ。

英語においても「リスト」の概念は Higgins(1979)の英語疑似分裂文の機能の特徴づけに「実質的にリストを作ることに近い」という形で用いられ、次のような例が挙げられている(Higgins 1979:154、訳は筆者による)³。(12b)ではコロロン (:) が使われているが、この記号はリストのタイトルを含む部分と項目を分ける機能をもつ。

12(a) What I bought was a punnet of strawberries and a pint of clotted cream.

(私が買ったのは苺ひとかごとクロッテド・クリーム 1 パイントだ。)

(b) I bought the following things: a punnet of strawberries and a pint of clotted cream.

(私は次のものを買った: 苺ひとかごとクロッテド・クリーム 1 パイント。)

ところで、(1b)のような指定文については別の特徴づけもなされている。それは文の一部分が質問であり、他の部分はその答えだというものである⁴。(1b)でいえば「誰が当直か」という質問に対して「田中さんだ」という答えとなる(西山 2003:133⁵)。この二つの特徴づけは同じもののように見える。しかし、この「質問」と「答え」が自然談話における質問と答えであるならば、「誰が当直?」という質問に対して「田中さん」という答えは総記でしかありえないだろう。とするとこの二つの特徴づけはこの点で違っているということになる。

しかし、考えてみると質問であっても、あてはまる要素すべてを要求する場合とそうでない場合がありうる。例えば、学生と社会人どちらをも含むグループの旅行を手配す

³ This function is, in effect, closely akin to listing, ... (p.154)

⁴ 三上(1963:164)では「問題(題目)と解答」(略して題と解)、上林(1988:71)では「『B』という表現で指示される指示対象、あるいは“B”という性質をもつものをさがせば、それは『A』という表現の指示対象である」としているが、同種の特徴づけである。

⁵ この記述は倒置指定文についてのものであるが、指定文と倒置指定文は同値としているので指定文についても同じように捉えていることになる。加えて倒置指定文・指定文の規定として(i)が述べられる(p.135)。

(i)A という 1 項述語を満足する値をさがし、それを B によって指定(specify)する。

る際に学生であれば学生用の割引チケットを購入するという(13)のケースなら、グループ内で学生である者を残らず把握する必要がある、答えに総記を要求する。それに対し一部だけを把握すればよい場合もある。例えば何かについて学生の意見を聞きたいので、グループから一人学生に来てほしいという(14)のケースであれば一人だけわかればよい。

13 A:「そろそろチケット手配しないとね。この中で{誰が学生?／学生は誰?}」

B:「田中さんと鈴木さんです。」

14 A:「学生にも一人来てもらわないと。この中で{誰が学生?／学生は誰?}」

B:「田中さんが学生です。田中さんでいいんじゃないですか。」

つまり、「リストを作る」(listing)という特徴づけ、「質問と答え」という特徴づけ、どちらであっても総記である場合とそうでない場合が存在するのである。しかし、日本語では質問には「誰が学生?」(指定文)と「学生は誰?」(倒置指定文)の両方が可能だが、答えが総記である場合には指定文・倒置指定文のどちらもが可能であるものの、総記でない場合には指定文しか使えない。

15 A:「そろそろチケット手配しないとね。この中で{誰が学生?／学生は誰?}」

B:「田中さんと鈴木さんが学生です。／(学生は)田中さんと鈴木さんです。」

16 A:「学生にも一人来てもらわないと。この中で{誰が学生?／学生は誰?}」

B:「{田中さんが学生です／×(学生は)田中さんです}。田中さんでいいんじゃないですか。」

「誰が学生?」という質問も、「～が学生です」という答えも、総記でもありうるしそうでない場合もありうる。つまり、指定文の「が」にどちらの解釈があるかということには文脈によって決定される部分がある、言い換えれば統語的な、あるいは意味的な制約のみで説明されるものではないということである。

2. 中立叙述「が」の制約

中立叙述の解釈がどのような条件で可能かということについては、久野(1973)が以下の制約を述べている。

17(a)中立叙述の「ガ」は、述部が動作を表すか、存在を表すか、一時的な状態を表すかの場合に限られる。述部が恒常的状态、習慣的動作を表す場合には、「ガ」は、総記の解釈しか受け得ない(p.32)⁶。

⁶ 久野は黒田成幸の分析によるとする。

- (b)状態を表す動詞、形容詞、形容動詞が目的語をマークする助詞として「が」をとる(p.51)。具体的には、能力を表す形容詞、形容動詞(「上手だ」「苦手だ」など)；内部感情を表す形容詞、形容動詞；動詞＋タイ；可能を表す動詞；自意志によらない感覚動詞；所有、必要を表す動詞
- (c)状態を表す述部の主語に数詞・数量詞が含まれていないと、その文は、(総記の解釈の文としては文法的であるが)、中立叙述の文⁷としては非文法的になる(p.35)。

これらを見ると、(17a)が大原則であり、(17b)(17c)はその例外規定である。(17b)は(18a-f)のような文で「が」に中立叙述の解釈があることを、「が」が下接する名詞句が目的語であるとして説明する。

18(a)彼女はテニスが上手だ。

- (b)私はみんなの心遣いが嬉しい。
 (c)私はワインが飲みたい。
 (d)彼はフランス語が話せる。
 (e)遠くに富士山が見える。
 (f)彼はお金がある。

これらの要素を目的語と判断する理由は意味から、または日本語で目的語をもつ動詞からの派生であるから、または他の言語で同様の意味が目的語として表現されるからということになるのだが、「上手だ」「苦手だ」のタイプはこれらの理由では説明されない。また、(18b)が例示する感情・感覚を表す形容詞・形容動詞、(18e)が例示する自意志によらない感覚動詞、(18f)が例示する所有・必要を表す動詞において「が」が下接する要素についても、目的語として表す言語は確かにあるが、そのことは日本語で目的語であるとする強い根拠とはならない。これらの要素に「が」が現れるという点でこれらは通常の目的語とは違っているので、例外規定ではない形で説明するのが望ましい。

(17c)は次のような文の「が」に中立叙述の解釈があることを説明するための例外規定である。

19 大部分の学生が金持ちの息子だ。

ただし、(17c')のように書き換えた方が例外規定としての性格が明確となる。

⁷ ある文が中立叙述文であることと、ある文に用いられた「が」が中立叙述の「が」であることは同一視しない方がよいと思われる。なぜなら、中立叙述文となるのは主節のみだが、「が」は従属節の中でも用いられるからである。

(17c')状態を表す述部の主語に数詞・数量詞が含まれていると、「ガ」には中立叙述の解釈がある。

本稿では(17a)で説明できない例、つまり述部が恒常的状态・習慣的動作を表しているが「が」が中立叙述の解釈がある例があることを指摘し、それらを説明する制約を提案する。さらに、その制約が(17b)(17c')によって説明された例をも併せて説明することを示す。

また、述部が恒常的状态、習慣的動作である文の「が」に中立叙述の解釈がないという制約は主節に限定されるという点に留意する必要がある⁸。名詞節、条件節などの従属節には主題の「は」が現れず、主語は常に「が」を伴う。

20(a)私は彼 {が／×は} 既婚者であることを知らなかった。

(b)私たち {が／×は} 独身だったとき先輩はしょっちゅう泊めてくれた。

(c)彼女 {が／×は} 賛成ならこの案で行こう。

3. 久野の制約の例外

「が」が用いられていて中立叙述の解釈が可能な場合には従属節のほかに(17b)(17c')で説明されない次のようなケースがある。

21(a)原作では主人公が女性だ。

(b)平日は映画入場料金が安い。

(c)この市では乳幼児の医療費が無料だ。

(d)平日ならチェックアウトが15時です。

22 明日の会が楽しみだ。

23(a) (「学生にも一人来てもらわないと。この中で {誰が学生?／学生は誰?}」)「田中さんが学生です。田中さんでいいんじゃないですか。」

(b) (「静岡のいいところを三つ挙げるとしたら?」)「富士山がきれいで、気候が穏やかで、魚が新鮮です。」

(c) (「なぜあのお店でやらないの?」)「田中さんが魚介アレルギー⁹。」

(d) (「フランス語の文献読めって言われた。フランス語なんて大学でちょっとやった

⁸ 久野(1973)は「主題の『ハ』と中立叙述・総記の『ガ』の区別は従属文中では中和される」(p.33)という形でこの制約を述べている。また野田(1996)は南(1974)を踏まえて従属節を下位分類しているが、ここではそこに立ち入らない。

⁹ この例では「だ」を使わない(23c)のほかに(ii)のような答え方も自然であるのに対し(i)は不自然だが、本稿ではこの点は扱わない。

(i)「×田中さんが魚介アレルギーです。」

(ii)「田中さんが魚介アレルギーなんです。」

だけなのに。)」 「田中さんが仏文卒だよ。」

(21a-d)の各文については、中立叙述と総記の両方の解釈が可能である。ただし総記の解釈が成立するような文脈が容易に想像できる場合とそうではない場合はある。これらの述部は恒常的状态であろうから、中立叙述の解釈があることは久野の制約では説明できない。(22)の文は(3b)と同じ「楽しみ」を述部にもつが、(3b)と違い、楽しみなことをすべて挙げたということを意味していないので、「が」は中立叙述の「が」である。(23a-d)では総記の解釈はなく、中立叙述の解釈のみとなる。

これらの「が」に中立叙述の解釈があるのはなぜだろうか。本稿では、それは「何らかの意味で上位に位置する要素がある」ということ、つまり「上位の要素がある場合に述部が恒常的状态であっても『が』は中立叙述の解釈をもちうる」と提案する。(21)については3.1節、(22)については3.2節、(23)については3.3節で扱う。

3.1 世界を作り出す上位要素

(21)の最初の要素には共通点がある。それは、これらは後続する命題が成立する世界(メンタルスペース理論で言うところのメンタルスペース)を作り出すということである。(21a)ではフィクションの世界が作り出されている。時間の副詞は時間軸上のある時点にのみ成立する世界を作り出す。場所の副詞はある場所でのみ成立する世界を作り出す。条件を表す要素は仮定の世界を作り出す。「チェックアウトが12時だ」「入場料が安い」「乳幼児の医療費が無料だ」「主人公が女性だ」はいずれも恒常的状态であるため、久野の制約のもとでは中立叙述の「が」は現れないはずである。このような世界を作り出す上位要素がある場合には恒常的状态を表す文にも中立叙述の「が」が現れるということになる。

3.2 名詞と同形の感情・感覚を表す形容動詞

次の二つの文にはどちらも「楽しみ」が述部に現れるが、すでに述べたように(24a)の「が」は総記の解釈のみであるが、(24b)の「が」には中立叙述の解釈がある。

24(a)絵を描くことが最近の{私/父}の楽しみだ。

(b)明日の会が楽しみだ。(=22)

この違いは、(24b)の「楽しみ(だ)」が(24a)の「楽しみ」と同じ名詞ではなく、話し手の感情を表す形容動詞であることに帰することができる。

まず意味が異なる。(24a)は話し手以外の習慣的な楽しみでありうるが、(24b)は話し手の未来の事態への気持ちを表すという解釈しかない¹⁰。そして、(24b)の「楽しみ(だ)」

¹⁰ 共通語では「楽しむ」は「将来のできごとを心待ちにする」という意味をもたないが、

は感情・感覚を表す形容詞・形容動詞と同様、経験者が話し手以外である場合にはモダリティ形式を用いる必要がある。

25(a)×彼女はみんなの心遣いが嬉しい。

(b)彼女はみんなの心遣いが嬉しい {ようだ／らしい／のだ}。

26(a)×彼女は明日が楽しみだ。

(b)彼女は明日が楽しみ {なようだ／らしい／なのだ}。

さらに、どのような修飾が可能かを見ると、(24a)の「楽しみ」は所有の表現を伴うのが普通で、形容詞との共起が可能であり、程度副詞による修飾はできない。それに対し、(24b)の「楽しみ (だ)」は所有の表現や形容詞との共起が不可能で、程度副詞による修飾が可能である。

27(a)×明日の会が {私／彼女} の楽しみだ。

(b)×明日の会が最近の楽しみだ。

28(a)明日の会がとても楽しみだ。

(b)×絵を描くことが父のとても楽しみだ。

また、感情・感覚の程度が強いことを表す表現に「～て仕方がない」「～てしょうがない」というものがあるが、(24b)の「楽しみ (だ)」もこれらの要素との共起が可能である。

29(a)まぶしくて {仕方がない／しょうがない}。

(b)嬉しくて {仕方がない／しょうがない}。

(c)明日の会が楽しみで {仕方がない／しょうがない}。

以上のことから、(24a)の「楽しみ」は通常の名詞だが、(24b)の「楽しみ (だ)」は程度副詞による修飾が可能なこと、所有名詞の修飾を受けないこと、さらに「楽しみなイベント」のような名詞修飾が可能であることから、形容動詞である。さらに(26)から、感情・感覚を表す形容動詞であることがわかる。つまり(24b)の「が」に中立叙述の解釈があることは(18b)のような感情・感覚を表す形容詞を述語とする文の「が」に中立叙述の解釈があることと同じように説明されることになる。

四国出身で愛知県居住歴の長い話者（生年大正時代）がそのような意味で「楽しんどう」と発話するのを聞いたことがあるので、方言の中には共通語の「楽しみにする」と同じ意味で「楽しむ」を使うものがあるのかもしれない。そのような動詞があるならば、(24b)の「楽しみ」はこの意味の動詞の連用形となる。

他にも名詞と同形の感情・感覚を表す形容動詞が存在する。「苦痛」「快感」「驚き」はそれぞれ感情を表す名詞だが、(30a-c)のような文では(24b)の「楽しみ(だ)」同様、話し手の感情を表す形容動詞である。

30(a)毎日の通勤が苦痛だ。

(b)お客さんが驚く顔を見るのが快感だ。

(c)彼がああ過酷なレースを完走したのが驚きだ。

これらも単純な形式では話し手の感情・感覚しか表さず、話し手以外の感情・感覚を表すにはモダリティ形式が必要となる。

31(a)×彼は毎日の通勤が苦痛だ。

(b)彼は毎日の通勤が苦痛 {のようだ／なようだ／らしい／のだ}。

32(a)×彼はお客さんが驚く顔を見るのが快感だ。

(b)彼はお客さんが驚く顔を見るのが快感 {のようだ／なようだ／らしい／のだ}。

33(a)×コーチは、彼がああ過酷なレースを完走したのが驚きだった。

(b)コーチは、彼がああ過酷なレースを完走したのが驚きだった {のようだ／らしい／のだ}。

ただし、「苦痛」「驚き」は名詞修飾をするが、「快感」はしない¹¹。

34(a)苦痛な時間

(b)×快感な体験

(c)驚きの出来栄¹²

これらは感情・感覚を表す名詞と同形の形容動詞だが、感情・感覚を表す名詞すべてに同形の形容動詞があるわけではない。「悲しみ」「悔しさ」などは同形の形容動詞をもたない。

35(a)×別れなければならないことが悲しみだ。

(b)×負けてしまったことが悔しさだ。

¹¹ つまり「快感(だ)」は文の述部にしか現れないという性質をもつ(杉浦 2017 ではそのような性質をもつ要素を非定型述詞という品詞として認めることを提案した)。

¹² 「驚き」の場合は名詞修飾をする際に「～な」ではなく「～の」という形をとるが、ここではこの違いについては述べない。

このように感情・感覚を表す形容動詞であるものについては、久野の分析では「が」によって表示されるものの目的語であり、例外として説明される。しかし、本稿では感情・感覚の経験者が上位要素として存在するためと考える。

3.3 再び listing

(23)でも恒常的状态を表す文の中に中立叙述の「が」が見られる。これらの応答では先行する発話があるタイトルをもつリストのタイトルを明示的に、あるいは暗示的に述べていて、次の発話がそのリストの項目あるいはそのような項目と関連する情報と特徴づけることができる。質問と答えを合わせると(36a-d)のリストと同じことが表されている。この中で(36a)はリストの項目が名詞句であり、(23a)の質問は「誰が学生？／学生は誰？」というものだが、文脈上リストは不完全でよいというものである。(36b)ではリストの項目は名詞句ではなく、(23b)の先行発話で「静岡のいいところ三点」が要求されているので、リストは完全である。(36c)でもリストの項目は名詞句ではなく、そのように明示的に述べられてはいないがリストは完全である。(23d)ではリストのタイトルは明示されていないが(36d)に示すように「フランス語が読めないという問題の解決方法」であると考えられる。このようなタイトルのリストの項目には「フランス語が読める人に教わる」「翻訳ソフトを使う」などが考えられる。とすると(36d)の項目は不完全なリストであるが、それとともにこの解決方法は明示されず、言語的に(23d)に示されるのは「田中さんがそのような人である」という、そのような人物の存在を示す情報である。

36(a)グループの中の学生

—田中さん

(b)静岡のいいところ三点

—富士山がきれい

—気候が穏やか

—魚が新鮮

(c)あのお店でやらない理由

—田中さんが魚介アレルギー

(d)フランス語が読めないという問題の解決方法

—フランス語が読める人に教わる

複数の項目が挙げられている(36b)で例示すると、同じように「静岡のいいところ三点」が挙げられていても、次の文の構造とは明確に異なる。

37 富士山はきれいだし、気候は穏やかだし、魚は新鮮だし、静岡は本当にいいところだ。

リストの構造の中で、それぞれのリスト項目はリストのタイトルとはもちろん関係があるが、項目どうしの間には直接の関係がない。それに対し、(37)はそうではなく、後に続く要素は先行する要素に累加されているという点で、要素の間に関係が存在する。つまり、談話の流れの中で「リストの項目を挙げる」文であるか、そうではない文であるかという違いがあるのである。今一度二つの文脈を比較してみると、リストの項目を挙げる文においては「は」は不適切で、要素を累加していく文脈では「は」の方が自然である。

- 38(a)「静岡のいいところを三つ挙げるとしたら?」「富士山 {が/×は} きれいで、気候 {が/×は} 穏やかで、魚 {が/×は} 新鮮です。」
 (b)「富士山 {?が/は} きれいだし、気候 {?が/は} 穏やかだし、魚 {?が/は} 新鮮だし、静岡は本当にいいところだ。」

項目が名詞句であればひとつの文の中で関係づけて表現することが可能であるが、項目が名詞句ではない(36b-d)の場合には談話の中でリストのタイトルと項目が示されることは可能であっても、(39)が示すように、一つの文の中で関係づけて表現することはできない。

- 39(a)×静岡のいいところは富士山がきれいで、気候が穏やかで、魚が新鮮です。
 (b)×あのお店がだめな理由は田中さんが魚介アレルギー。
 (c)×フランス語が読めないという問題の解決方法は{フランス語が読める人に教わる/田中さんが仏文科卒だよ}。

(23a-d)(36a-d)からわかることは、リストの項目が名詞句である場合にはリストが不完全である場合に限り「が」に中立叙述の解釈があり、リストの項目が名詞句でない場合にはリストの完全・不完全にかかわらず「が」に中立叙述の解釈があるということである。

また、大喜利ではお題として「こんな●●はいやだ」が与えられ、参加者が答えの面白さを競うというものがある。ひとつの例を挙げる¹³。(一部抜粋)

- 40【あるある大喜利】こんなディズニーランド・ディズニーシーは嫌だ
- ・ミッキーがほんとのネズミだ。
 - ・キャラクターがヤル気ない(ベンチで昼寝、客に悪態をつく)。
 - ・ワールドバザールがほんとのバザール(商人による来場客へのポッタクリ有)
 - ・シンデレラ城が、ハリボテ。
 - ・ハニーハントの蜂が本物

¹³ <http://kogusoku.com/archives/1535> アクセス日 2018/3/31

- ・ 花火が線香花火

このように、述部が恒常的状态を表すが中立叙述の「が」が現れている。これも、示されたリストのタイトル(「こんな特徴をもつディズニーランド・ディズニーシーは嫌だ」)にあてはまる項目を挙げて行く文であるためである¹⁴。このタイプはリストの性質上総記となることはない。

これらの場合にはリストのタイトルが上位要素として存在すると考えられる。

4. 数詞・数量詞を含む主語をもつ文

次に(17c')の制約を検討してみる。久野の制約の修正は以下のものであった。

(17c')状態を表す述部の主語に数詞・数量詞が含まれていると、「ガ」には中立叙述の解釈がある。

この制約は状態を表す述部をもつ次のような文の「が」に中立叙述の解釈があることを説明する。

41(a)この国では、皆が金持ちです。

(b)私のクラスでは、五人が男で、六人が女です。

(c)大部分の学生が独身です。

(d)ほとんどの学生が金持ちの息子です。

(41a,b)は世界を作り出す上位要素がある文として説明される。しかし、(41c,d)にはそのような上位要素がなく、別の説明が必要となる。しかし、これらの文で「が」に中立叙述の解釈があることを説明する必要があるのと同様に、次の文の非文法性も説明の必要がある。(17c')ではこれらの非文法性の説明はできない。

42(a)×数人の社員が独身です。

(b)×五人の学生が金持ちの息子です。

(41c,d)と(42a,b)の差を見ると、次のように考えるべきと思われる。数量詞を含む主語に

¹⁴ このリストには次のように「は」を用いたものもある。この場合「は」を「が」と変えても意味の違いが生じない。「は」の解釈については今後の課題としたい。

(i)・ 土日は休園

- ・ 園内の椅子は全て空気椅子

- ・ 飲み物は全ておしるこ

- ・ 食べ物全て大福

中立叙述の「が」が下接することが可能なのは、文が主語内の名詞句((42a)では「社員」、(41c,d)(42b)では「学生」)の特徴づけとなる場合のみである。「大部分が独身である」ことや、「ほとんどが金持ちの息子である」ことは「学生」という集合の特徴づけになるが、「数人が独身である」ことや「五人が金持ちの息子である」ことはそれぞれ「社員」という集合、「学生」という集合の特徴づけにならない。(41c,d)は(43a,b)のように主語内の母集団を指示する名詞句を主題とする文と意味が等価であるという事実もこの分析を支持する。それに対し、(42a,b)については対応する文(44c,d)も同じように非文法的である。

43(a)学生は大部分が独身です。

(b)学生はほとんどが金持ちの息子です。

(c)×社員は数人が独身です。

(d)×学生は五人が金持ちの息子です。

(41c,d)の「大部分」「ほとんど」のように、全体の中での割合が大きいということは特徴づけになりやすいが、特徴づけであるためにはこれは必須ではない。例えば、ある資格をもつ人がその業界で働く人の1割以下であったなら、ある社で有資格者が2割いるということはその社の特徴づけとなり、(44a,b)の文が可能となる。

44(a)社員の2割が有資格者です。

(b)社員は2割が有資格者です。

つまり、(43a,b)(44b)のように母集合が主題として現れている場合も、(43c,d)(44a)のように表面上の主題がなく、母集合が数詞・数量詞を含む主語内にある場合も、上位要素として母集合が存在すると考えるべきである。そして、そのために「が」に中立叙述の解釈が可能なのである。

5. 制約の性質

上述したように、本稿の主張は「上位要素がある場合には述語が恒常的状态・習慣的動作であっても『が』に中立叙述の解釈がある」というものである。これと類似の仮説(45)が久野(1973)によって検討され、破棄されている。

45 主題の後の[総記]の「ガ」は中和されて[叙述]の「ガ」となり得る(p.39)

久野は、次のような例において主題があるにも関わらず「が」が総記の解釈しかないとから、この仮説は正しくないとする。

- 46(a)日本語は太郎が下手です。
(b)頭は太郎が悪い。
(c)男性は、このクラスがよくできる。
(d)男性は、日本が短命です。

しかし、これらは明らかに語順が基本的なものではない。助詞として何が現れるかと関係なく、次の語順が基本的なものである。

- 47(a)太郎 日本語 下手
(b)太郎 頭 悪い
(c)このクラス 男性 よくできる
(d)日本 男性 短命

よって(45)が基本的語順に適用されるものとすれば、これらは反例ではなくなる。そして、これらがどのような文かという点、(47c-d)は「このクラスの男性 よくできる」「日本の男性 短命」とも表現できることから「象は鼻が長い」構文と同じタイプである。それに対し(47b)は「太郎の頭 悪い」と表現できず、野田(1996)が「慣用句として強く結合して一つの述語となっている」(p.39)とするタイプとなる。(47a)は久野の「能力を表す形容詞・形容動詞」のタイプである。このタイプでは「の」での言い換えが可能な場合とそうでない場合が見られる。

- 48(a)太郎の日本語は {下手だ／上手だ／うまい／×得意だ／#苦手だ¹⁵}。
(b)太郎のテニスは {?下手だ／?上手だ／?うまい／×得意だ／#苦手だ}。

また、「は」には主題の「は」と対照の「は」があるとされるが、ひとつの文には主題はひとつのみであり、そのためひとつの文の中に「は」が二つある場合には二つめは対照という解釈しかないという観察がされている(三上 1970:63、久野 1973:30)。この観察は(49)のような文にもとづいたものである。(49)の文で「象」が主題の解釈を受ける場合、「鼻」は象の体の他の部分と対比される解釈しかない。(47b-d)で例示されたタイプの文についても(50a-c)で示すように二つめの「は」には対照の解釈のみである。

- 49 象は鼻は長い。
50(a)太郎は頭が悪い。
(b)このクラスは男性はよくできる。
(c)日本は男性は短命です。

¹⁵ # という記号は文に文法的な解釈はあるが意図したものではないことを示す。

つまり基本語順においては「主題の『は』の後の『が』は述語が状態であっても中立叙述の解釈がある」、「主題の『は』の後の『は』は対照の解釈のみとなる」という二つの一般化ができる。前者の一般化は、ここである上位要素に主題も含まれると考えれば本稿の主張に含まれる。しかし、後者の一般化は本稿で扱って来たものにはあてはまらない。

まず世界を作り出す上位要素をもつ文を見る。

51(a)原作では主人公は女性だ。

(b)平日は入場料は安い。

(c)この市では乳幼児の医療費は無料だ。

(d)平日ならチェックアウトは15時です。

(e)土日だとチェックアウトは10時です。

(51)が例示するように、世界を作り出す要素をもつ文では、「は」には主題の解釈と対照の解釈のどちらも可能である。以下、(52-55)で(a)に二つ目の「は」が主題の解釈になるような文脈を、(b)に二つ目の「は」が対照の解釈になるような文脈を示す。

52(a)「主人公は男の子だっけ?」「ううん、原作では主人公は女性だ。」

(b)原作では主人公は女性だ。他の登場人物は全部男性だけど。

53(a)「入場料高いの?」「ううん、日曜は入場料は安いよ。」

(b)日曜は入場料は安い。だけどアトラクション代は同じだし、平日より混む。

54(a)「乳幼児の医療費はどうなってます?」「この市では乳幼児の医療費は無料だよ。」

(b)この市では乳幼児の医療費は無料だ。でも生活費はむしろ高い。

55(a)「チェックアウトは何時ですか?」「平日ならチェックアウトは12時です。」

(b)平日ならチェックアウトは12時でチェックインは16時です。

この状況は世界を作り出す上位要素が存在しない場合と同じであるので、「は」の解釈を決定するにおいてこれらはないものとして扱われている。しかし、3.1節では上位要素として存在するからこそ「が」に中立叙述の解釈があるとした。これを見ると、このような上位要素はあるものとして見ることもできればないものとして見ることもできるようである。実際に次のように「が」を用いた文と主題の「は」を用いた文の意味の違いは小さい。

56(a)原作では主人公が女性だ。

(b)原作では主人公は女性だ。

57(a)日曜は入場料が安い。

- (b)日曜は入場料は安い。
- 58(a)この市では乳幼児の医療費が無料だ。
- (b)この市では乳幼児の医療費は無料だ。
- 59(a)平日ならチェックアウトが 12 時です。
- (b)平日ならチェックアウトは 12 時です。

リストの項目を列挙する文では、項目が名詞句である(60)においては主題の「は」が許容され、項目が名詞句ではない(61a,b,c)においては主題の「は」は許容されない。

- 60 (「うちの課でまだ結婚してないのって誰だっけ?」)「田中さんは独身ですね、それから鈴木さんは独身です。ほかはわかりません。」
- 61(a) (「静岡のいいところを三つ挙げるとしたら?」)「×富士山はきれいで、気候は穏やかで、魚は新鮮です。」
- (b) (「あのお店でやらない理由は何なの?」)「×田中さんは魚介アレルギー。」
- (c) (「フランス語の文献読めって言われた。フランス語なんて大学でちょっとやっただけなのに。」)「#田中さんは仏文卒だよ。」

名詞句の場合に「は」が許容される理由としては、想定される集合の中で既知であるためと思われる。

感情・感覚を表す形容詞・形容動詞をもつ文においては経験者である話者が表現されないことも多いが、表現される場合には二つ目の「は」に主題の解釈は存在する。

- 62(a)私はみんなの心遣いは本当に嬉しい。
- (b)私は明日の会は本当に楽しみだ。

そして、この場合にも主題の「は」を用いた文と中立叙述の「が」を用いた文の意味の違いが小さい。

同様に、能力を表す形容詞・形容動詞、動詞＋タイ、可能を表す動詞、自意志によらない感覚動詞、所有・必要を表す動詞についても、以下のように主題の「は」の解釈が可能である。主題の解釈の可否は文脈に左右されるが、基本的に可能と考えるべきと思われる。

- 63(a)彼女は歌は苦手だ。
- (b)私はこのワインは結婚記念日に飲みたい。
- (c)彼はフランス語はひととおり話せる。
- (d)私たちには彼の姿はよく見えた。

(e)我が家には車は2台ある。

数詞・数量詞を含む名詞句の場合にも「は」には主題の解釈が存在する。このタイプでも「は」を用いても「が」を用いても意味の違いが小さい¹⁶。

64(a)学生は大部分は独身だ。

(b)社員は2割は有資格者だ。

このように、「主題の『は』の後の『は』は対照の解釈のみとなる」という一般化は「象は鼻が長い」タイプには成立するが、ここで扱ったタイプには成立しない。とすると、「象は鼻が長い」タイプと、ここで扱ったタイプにおける上位要素は違ったものとするのが妥当である。前者は主題と呼ぶのが妥当であろう。ただ、ここでいう上位要素をどのように捉えるかが問題となる。「能力を表す形容詞・形容動詞」においてはこの上位要素は統語的な主語と考えるほかない。世界を作り出す副詞をもつ文、数詞・数量詞を含む名詞句が主語となる文においては上位要素は意味的な概念であるように思われる。そしてリストの項目を表す文においては上位要素は語用論的なものでしかありえない。本稿ではこのように多様なものを上位要素という概念で括ったが、その妥当性を今後検討していく必要がある。

6. 結び

本稿では「が」の機能のひとつとして知られる総記の中に含まれる「ある条件にあてはまる要素を挙げること」(listing)について考察し、すべての要素を挙げる場合と一部の要素を挙げる場合があること、項目の挙げ方にまとめて挙げるやり方とひとつずつ挙げて行くやり方があること、そのように挙げられる要素(リストの項目)が名詞句である場合とそうでない場合があることを指摘した。指定文の「が」が総記の解釈と言われるのは、リストの項目が名詞句であり、項目の挙げ方がまとめて挙げるやり方であり、あてはまる要素がすべて挙げられている場合である。また、「が」の中立叙述の解釈がどのような場合に可能かを検討し、述語が恒常的状态・習慣的動作である場合に中立叙述の解釈が可能であるためには上位要素があることが必要だと述べた。この上位要素には統語的な要素、意味的な要素、そして語用論的な要素が含まれる。

¹⁶ なお、数詞・数量詞を含む文で「は」が「少なくとも」という意味をもつ場合がある。
(i)(ii)の数詞に下接する「は」はそのような意味しかもたない。このようなものは対象から外す。

(i)学生が {5人／半分} は来た。

(ii)学生は {5人／半分} は来た。

参考文献

- Akmajian, A. (1970) 'Aspects of the grammar of focus in English.' Ph.D. thesis, M.I.T.
- Declerck, R. (1988) *Studies on copular sentences, clefts and pseudo-clefts*. Leuven University Press.
- Fauconnier, G.(1994) *Mental spaces: Aspects of meaning construction in natural language*. Cambridge University Press.
- Heycock, C. (2007) 'Japanese wa, ga, and Information Structure.' In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds) *Handbook of Japanese Linguistics*. Oxford University Press
- Higgins, F.R. (1979) *The pseudo-cleft construction in English*. Routledge Library Editions: the English Language Vol.13
- Kuroda, S.-Y. (1964) 'Generative grammatical studies in the Japanese language.' Ph.D. thesis, M.I.T.
- 上林洋二(1988)「措定文と指定文：ハとガの一面」『文藝言語研究 言語篇』14 pp.57－74
- 杉浦滋子(2017)「日本語の非定型述詞」日本語学会 2017 年度秋季大会口頭発表
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論 ―指示的名詞句と非指示的名詞句―』ひつじ書房
- 野田尚史(1996)『「は」と「が」』新日本語文法選書 1 くろしお出版
- 三上章(1960)『象は鼻が長い』(三上章著作集) くろしお出版
- (1963)『日本語の構文』くろしお出版
- (1970)『文法小論集』くろしお出版
- 南不二夫(1974)『現代日本語の構造』大修館書店

